

第 20 回 日本生殖心理学会 学術集会

ポスター番号 4

東京 2023.2.5

【演題名】 妊孕性温存に関する意思決定支援を考える

【氏名】 柴崎 有美 (シバサキ トモミ) 【会員番号】 5278

【所属】 IVF 大阪クリニック (アイブイエフオオサカクリニック)

【共同研究者】 小松原千暁 (コマツバラ チアキ) \*1

福田愛作 (フクダ アイサク) \*1 森本義晴 (モリモト ヨシハル) \*2

【所属】 IVF 大阪クリニック (アイブイエフオオサカクリニック) \*1

HORAC グランフロント大阪クリニック (ホーラックグランフロントオオサカクリニック) \*2

#### 発表要旨

【目的】 がん生殖医療では時間的制約がある中で様々な選択を迫られる。妊孕性温存に関する選択が困難であった事例から、その要因と意思決定支援のあり方について検討した。

【症例】 31 歳、女性。29 歳で結婚。子どもなし。初期非浸潤乳がんのため手術を受けた。術後追加治療のホルモン療法を実施する前に妊孕性温存を薦められ、術後 2 ヶ月で放射線療法中に相談目的で当院を受診。乳がん治療と併行して子宮内膜症の治療も受けていた。

妻は結婚前から挙児を希望していなかったが、乳がん罹患を契機に希望するようになった。一方、夫は直ぐの挙児を希望し妊孕性温存治療を受けてまでは希望しないと一度も面談の機会はなかった。初回面談時、妻は乳がん治療と子宮内膜症による妊孕性低下への不安から妊孕性温存に前向きであったが、夫が消極的であったため夫婦で相談できずにいた。看護師から夫の協力が困難な場合、妊孕性温存法として胚凍結保存以外に卵子凍結保存の選択肢があるという情報提供をし、夫婦での話し合いを促した。しかし当院での面談期間中に夫の考えが変わることはなく、妻の思いが夫に伝わらない状況に加え 3 回目の面談直前に乳がん担当医から今直ぐ挙児希望するなら術後ホルモン療法は省略可能と説明され、術後ホルモン療法を省略することの不安と妊孕性温存治療の判断との板挟みに困惑していた。そこで治療状況に応じた選択肢を視覚化し図示することで現状を把握し、妊孕性温存も含め検討できるよう支援した。また夫へのアプローチ方法も提案したが、結果として妻は妊孕性温存治療を選択しなかった。

【結論】 夫婦間で挙児希望や妊孕性温存に対する認識の違いがあり、夫と直接面談できない状況で妊孕性温存治療を実践することの困難さを痛感した。また、自己決定された結果はいかなるものであっても尊重されるべきとも感じた。今後も患者に合わせた適切な情報提供、介入のあり方を検討していきたい。